

# 大阪千代田短期大学 幼児教育科の果たすべき役割

寄 　　ゆかり\*

Osaka Chiyoda Junior College  
The role of the Department of early childhood education

Yukari Yori

---

【キーワード】教育, 目標, 音楽, 定着, 成果  
education, goal, music, establishing, result

## 1. 大阪千代田短期大学との出会い

大阪千代田短期大学の専任教員となって、今年度で17年目となる。その前に8年間の非常勤講師でピアノや器楽活用法の科目を担当していたので、合わせると25年の短大での教員生活となり、もう四半世紀になる。

私が教員をするきっかけとなったのは、短大時代に遡る。私が学生の頃は、保母、幼稚園教諭、そして小学校教諭免許を取得することができた。さすがに小学校免許を取得する学生は少なく、幼小免許取得希望は数人だったのを覚えている。それ以外の学生は、殆どが幼保であった。そのような中で、私はあえて、「幼稚園免許のみ取得」と入学当初から公言していた。学生たちの本学への入学志望理由は今と変わらず、大半が「幼稚園、保育園の先生になる。」ことだったので、それぞれが自らの目標に向かって邁進していた。

私は入学時から、将来の就職希望がヤマハ音楽教室のシステム講師で、本学の学生の中では異端児だったと思う。なぜ、ヤマハの先生になりたいのに幼児教育科に入学したのか、それは音楽大学に行くことは我が家の家計状況からいってもかなわず、しかし、ヤマハの先生になるための「短大卒業以上」の学歴が必要なこと、それならと自分の関心のあった心理学や子どもの指導をするための知識を得るために、この大阪千代田大学幼児教育科に入学した。

その当時では珍しく、今の千代田短大と変わらず、本学では入学試験にピアノの試験が課せられていなかった。そのためピアノ初心者が多く、入学してから「ピアノが苦手」と苦戦して

---

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学 幼児教育科・学科長

いた学生たちが多くいた。それでもあの頃の学生たちは、残ってよく練習もしていた。そうすると難しく弾けないところが出てくる。そのため、「ピアノの先生には聞きにくい。教えて。」などと友人だけでなく、他のクラスの学生などからも気軽に声をかけられ、ピアノを教えていた。卒業式や入学式でもBGMなどの演奏を任せられたり、軽音楽部（と言っても、私の頃は、今でいうJ-POPなどを演奏していた）の部長で演奏したり、と音楽での発表する場が多くあった。そのようなことから、徐々に同級生の中で「音楽が少しできる人」と広がっていった。しかし一方で、保育資格の科目は履修していなかったため、その空き時間はピアノの練習や理論の勉強など、音楽の勉強に明け暮れていた（私は私で、ヤマハに就職してくる音楽大学出身の学生には負けられない、と必死に勉強していた）。そのため、他の学生たちには、多分、よく休む学生だと思われていたような気がする。志望通りヤマハの先生となったが、その経験も活かして、その後、本学の非常勤講師となった。

## 2. 保育者養成における音楽の力

非常勤講師で本学に戻ってきた時には、ピアノの先生ということだったが、他の先生とは大きく異なる利点を活かそうと考えた。それは、私が卒業生であるということ、ある程度、本学学生たちの困っていることや本当に学びたいところが予想できたことである。その当時の学生たちの多くも、入学してからピアノを始めており、ピアノに対してコンプレックスを持っていた。当然、運動機能的にも幼少期から始めた学生とは異なり、五指が思うように動かず、「自分の指でありながら、自分でない。」と同級生たちが困っていたことを思い出した。しかし、その動かない指を動かすためには繰り返し練習することも必要なことである。一人での練習は孤独でもある。それに打ち勝つ精神と、自分の目標に向かって立ち向かえるようにするためには、教師としてどのようなアドバイスや指導をすべきか、ということを常に考えていた。また、音楽そのものは楽しめるのに、ピアノになると途端にその顔は強張ってしまう学生たちに、何とか「保育における音楽の必要性」が理解できるよう、授業内容の改定にも取り組んだ。その当時の音楽教授は大変包容力があり、授業方法の改善などの提案にも耳を傾けてくださり、私のヤマハでの経験を活かしたグループ授業なども担当させて頂くこととなった。

学生たちは、ピアノの授業では緊張しているのに、例えばグループでの合奏や歌などになると、生き活きと伸び伸びと音楽を楽しんでいる様子が見られる。この違いは何だろうか、ここは音楽の専門家を養成するところではない、保育者の養成をするところである。保育での音楽、保育者養成での音楽は何を目指すべきか、これが私の研究テーマとなっていく。

### 3. 保育者養成校でめざすべきこと

その後、専任教員となり、学生たちとの年齢がどんどん離れてきたが、私自身の気持ちとしては、就任当時と変わっていない。他の学科と異なり、保育者養成校では「免許、資格取得」というひとつの大きな目標をもとに入学してきている。保育に携わるための知識を得るには、本当に2年間では足りないと感じる。しかし、この2年間で私たち教員は、学生に伝える知識、技術を教育し、学生がいかに理解し、習得できるかを考えるべきである。そして最も大切だと考えていることは、これらの学びを通して、対人援助職、教育者として、どのように人と関わるかを学ぶことではないかと思っている。もちろん実習は欠かせない大きな柱であり、理論と実践が結びつくことで、保育者が養成できるのである。入学当時の学生たちが卒業式で凛々しく立っている姿には、教育の成果も感じ、毎年喜びもこみ上げて来る。しかし、更に私自身が、自分への問いかけをしていることがある。

学生たちは就職決定がゴールだと思っているところがある。義務教育から始めて学生としてはこれがゴールかもしれない。しかし、終わりではなく、ここからが始まりだと伝えたい。学んだことが本当に身についているのか、現場ですべて活かせるだけの力を得ているのか、自分に問いかけてほしい。私たちは、学生自身が「学び続けなければならない」と感じて、社会人となって巣立っていくことを願って、日々の教育をしていきたい。